幸平と真琴の日常

歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸平と真琴の日常

【Ｎコード】
Ｎ９９０７Ｗ

【作者名】
歌音

【あらすじ】
ーこれは僕と彼女の物語ー

借り物競争（前書き）

イメージＯＰ

ＳＯＵＬ　ＬＯＶＥ／ＧＬＡＹ

借り物競争

本文

僕ー南部幸平が彼女ー磯部真琴を好きになったのはいつだったか。
そんなことを考えながら明日行われる体育祭の説明を聞いていた。
体育祭と言っても所詮は田舎では無いが都会でもない、住宅街の真ん中にある高校なので其処まで大規模なモノではない。１人二種目出ればいいと言うルールがあるだけだ。

体育祭の種目は　定番のモノからパン食い競争、借り物競争だだ。
なんで、パン食い競争を高校生にまでやるのかってツッコミたかったが、肉欲（主に食欲側）には負けたので何も言わなかった。ちなみに何のパンかは当日まで秘密のようだ。

…好きなコロッケパンでありますように！

と心で念じてしまった、二時間前。

因みに５０ｍ走とパン食い競争にでる。短距離は自身があって、陸上部にも負けない自身がある。実際はクラスで一番早いのだが。

気がついたら教師はクラス委員から貰った学級日誌をまとめていた。
もうＳＨＲは終わったみたいだ。

「幸平くん」

と呼ばれたので振り向くと…

「…真琴さんか…」

さっきまで考えていた僕の片思いの人が後ろに立って居た。
磯部真琴ーー黒髪で長髪、背は普通より小さい。容姿は可愛らしく目がパッチリとしている。

それに対して僕は身長は１７０後半、髪は短髪、容姿はあまり気にしない。
ただ、男友達に言うとキレられる。何故だ…

因みに彼女とは中学からの友人でずっと同じクラスだ。
何と言う幸運！

「どうしたの？何か用事？」
と聞くと、

「え、えっとね、あのね…」

真っ赤になりながらあたふたし始めた。
そして、さっきから後ろのロッカーをチラチラしている。ロッカー付近にいる彼女の友人達はニヤニヤしながら、頑張れ～だの覚悟を決めろ～だの言っている。

…一体何なんだ？

「とりあえず、落ち着いて。慌てずに言ってみようか？」

と、優しく諭すと真琴は深呼吸を繰り返した。

…可愛いなぁ…

「お、落ち着いた？」
「う…うん。もう平気…」
「で、僕に何かあるの？」
「うん、あのね…」

「一緒に帰って欲しいの…」

…一瞬耳を疑った。しかし、自分は難聴でもないので真実だろう。

「えっと、僕とだよね？」
「うん、だって家が近いし…」
「なんだ…まぁ、それなら構わないよ。一緒に帰ろう？」
「うん！」

パッと笑顔になった。えくぼが印象的だ。
多分、こういう事が重なって好きになったのかなぁってかんがえる。
…ロッカー付近では最大のニヤニヤを浮かべた彼女の友人を居たのはスルーしよう。

帰り道、他愛ない会話で盛り上がりながら歩いて居た。

「そういえば、真琴さんは何に出るの？」
「んとね～、借り物競争と棒引きかな。」
「へぇ、そうなんだ。僕は５０ｍとパン食い競争なんだ。」
「うん、知ってる」

ニコニコ笑顔で返された。…何故に知っているんだ？

「まぁ、いいや。じゃあ、真琴さんを応援しなきゃね。」

「うん、頑張るからね！幸平くんもがんばってね！」

ギュッと手を握られた。顔が赤くなりそうになるが頑張って抑える。逆に真琴は真っ赤のまま見上げた。

…ちくしょう、可愛いな！抱きしめたい！

という、衝動に駆られたが必死に止める。

「じ、じゃあ、明日はお互い頑張ろうね！」

「う、うん！」

そう言って照れながら微笑み合い、帰った。

体育祭当日

居ような盛り上がりを魅せている。

僕の５０ｍは１位を取れた。少しは貢献できたかな？と思った。

帰ってきた時は真琴さんに抱きしめられ嬉しいが周りから冷やかされた。

次は真琴の借り物競争だ。紙に書かれたモノを持ってくるという一般世間と同じルールだが、最後にお題を読まれると言うルールも追加されている。

「頑張って！真琴さん！」
「うん、ありがと！幸平くん！」
と言い、にこやかに走り去った。

競技が始まった。
「頑張れ～！」
あちこちから歓声があがる。ボルテージはＭＡＸだ！みたいな感じか。
そして、何故かＢＧＭがカーペンターズ。
…チョイス何か間違ってないか？

まぁ、いいか。競技は進行して真琴はお題の紙を拾っていた。
顔を真っ赤にしながら…

そして、真琴がやって来て

「幸平くん！私と来て欲しいの！」
「何で僕なの？」
「だって…お題がそうなんだし…幸平くん以外考えられないの！」

前半は上手く聞き取れなかったけど、後半聞いて思わず顔を赤くする。

「おい、南部！ご指名だぞ！行ってやれ！」
「キャ～なになに？どんなお題なの？！」
「うっさい！ほら、真琴さん行こ？」

「うっ…はぅ…」

思わず手を握ってしまうが全く意識をしない。無意識ってヤツだ。

「しかし、何てお題なんだ？同じ中学の友人とかか？」

「…全然違うよう。もっと、素敵なお題なの…」

「？」

「もうっ、いいから！早くゴールしちゃおう！」

思いっきり手を引かれた。

…柔かい…

「はい、ゴール！」

「お疲れ様です。では、お題を見せてください。」

「うぅ…はぃ…」

真っ赤になりながら紙を司会に渡した。

「えっと…『好きな人』ですね。間違いないですか？」

「はぃ…」

「誰がだ？」

「幸平くんだよ！好い加減気づこうよ、鈍感！」

えぇ！マジですか！好きな人から好きって言われちまったよ！にやけが止まらないよ！

「え、じゃあ、真琴さんが僕の事を好きだって事だよね？」

「うん…そうだよ！大好きなんだよ！」

会場は黄色い声で響き渡った。

そして、帰り際に

（体育祭後で屋上に来て…）

体育祭後、言われた通りにやって来た。先に真琴は居たみたいだ。

「私はさっき宣言したとおり、幸平くん…いや、幸平がだ、大好きなの。その、つ、付き合って欲しいってとも思っているの。だから、幸平から返事を聞きたいの。私とつ…付き合ってくれる？」

これはヤバイ…まさかこうなるとは…現実と頭がついて行ってなかったが、どうにか落ち着いた。

「ふぅ…僕もね、真琴さんが大好きなんだよ。ずっと黙ってたけどね。こう言うと恥ずかしいなぁ…」

「え、私が好きなの？本当に？」

「うん、大好きだよ。だから、僕からもお願いするね。

…僕とつ、付き合って下さい！」

「…喜んで…！」

涙を見せながら笑顔で答えた。そんな彼女を抱きしめて、キスをした。

こうして、僕は真琴の恋人になり付き合い始めたー

借り物競争（後書き）

歌音「いくらなんでも短編にしては長いので長編に纏めました！」
幸平「うん、そっちがいいと思うよ」
歌音「確かにねぇ…とりあえず、こっちは一日二回更新して行きます」
幸平「宜しくお願いします！」

お祭り騒ぎ（前書き）

忠告し忘れましたが、元は短編なので一話が相当長くなります。

そこのところご了承願いますm（＿＿）m

お祭り騒ぎ

高校生と言えば、体育祭の他に特別な学校行事と言えば文化祭。

今日は文化祭前日のためみんなで残って準備をしていた。僕ー南部幸平のクラスはお化け屋敷だ。クラスの方針としては「トラウマに残るほど怖いお化け屋敷にしようぜ！」のようだ。たかが文化祭のお化け屋敷でトラウマになるほど怖いのが作れるのか？って思ってしまったのだが、クラスは本気のようだ。

今、僕は残って1人でお化け屋敷の仕掛けを作っている。1人でと言うのはとっくに下校時刻が過ぎているからだ。教師が巡回する可能性が有るので、ペンライトで作っている。今作っているのは、幽霊の人形につける仕掛けだ。この人形を作るのにお化け屋敷の中心人物に4回もダメだしされた。今はローラーとワイヤーを使って前から迫ってくる仕掛けを一回動かして最終調整をしている。

誰もいないため音楽を聞きながら口ずさんでいた。

「ふん～…ふん～…ふっ！」

いきなり柔らかい感触が来ました。正直、ビビります。

「ん～…はぅ…えへへへ…」

「いや、真琴！えへへじゃないから！」

グイっと押し返す。掌に何か感触を覚えて「あっ…」と声がする。

体育祭で告白されて（して？）付き合い始めた。デートもしたし、キスもたくさんしている。それ以上はまだしていないが、幸せな日常を描いている。周りから言わせれば、ベタベタでイチャイチャしている様なモノだ。１つ変わった事は大胆になった事。付き合う前じゃ全然想像できなかっただろう。
つか、人間ってここまで変われるんだねという感想をもちました、はい。

ー以上現実逃避終了。

事故と言え、触ってしまった真琴の胸。「きゃあああ！」と騒がれるのかと思っていると、満更でもない顔で
「…どう？年頃の男の子としては触れて嬉しい？」
「いや、待ちましょうよ！ってか、手を押し付けないで！色々と不味いから！」
「何が問題なの？それとも私のに触りたくないの触りたくないんだなこの前はあんなに私を求めて来たのに飽きたのそうか飽きたんだね私はこんなに愛しているのに遊びだったのね！」
「ちょ、待て！最早断定になってますよ！話を聞いて？！」

頭がパニクる。人の前に立った時の感覚に似てる。

「うわあああああん！！」

何か泣き出しましたよ！手で顔を抑えて泣いてるよ！？

「分かった！分かったから！何でも言う事聞くから泣き止「本当だね！嘘だったらダメだよ！」…はい」

ちくしょう、嘘泣きか！騙された…何か真琴が段々狡猾になってるが流そう…もうツッコミきれない…

「じゃあねぇ～…私の好きにさせてね！」

「こらこら！」

飛びかかって来て抵抗できない僕。情けないなぁ…って！

「何ボタン取ろうとしてるの！はしたないからやめなさいいや真琴様やめて下さいお願いします！」「やぁ～だ」

…こらこら！性格破綻してるぞ！前の恥じらいのある真琴カムバック！いや、今の真琴も良いけど！

「何をしているんだ！うわっ…！」

教師が教室に入ってきたのは良いが、僕が紐を引っ張ったらしく人形がすべりだして、教師に向かっていった。

教師は慌てて逃げて行った。こちらもスキができたため魔の手から逃れる。

「ほら！真琴帰るよ！」「えぇ～…幸平ぇ…」

甘えてきたがとりあえず、キスをして黙らせる。こうすると暫くは夢見心地になる様だ。

…文化祭前日にこんなんで大丈夫かなぁ…

文化祭当日。二日間あり、一日目は僕ははずっと当番で真琴は膨れっ面で一日中居た。なので、二日目は一緒にいる事にした。もともとそうするつもりだったけどね。

「えへへ…ふふっ…！」と真琴は気持ち悪いと周りに言われそうな程笑顔だ。僕はそんな風には思わないけどね。

「どこに行きたいの？何か希望はある？」

「このマカロン屋に行きたいなぁ！後は映画と…アトラクションも捨てがたいなぁ…」

「まぁまぁ、時間は有るんだしゆっくり回ろうよ。ね？」「うん！」

…今日は楽しい一日になりそうだ。

暫く遊びながら回っていると、『カップル度計測！さぁあなたの愛情はいくら？』と言ういかにも囃し立てる様な目的で作られた様な出し物が有った。スルーを決め込もうとしたのだが、世の中そんなに甘くない。

「ほら、幸平！ここ入るよ！」と引っ張られる。…誰か頭痛薬を持って来て…

ー頭痛より胃が痛い。何故かキスをする流れになり、真琴から押し付けられるようにされそうになったため、自分から押さえつけ返した。真琴は真っ赤になったが無視した。人前は恥ずかしいのだ。勿論、囃したてられるは知り合いがいたため、写真を撮られてメールで送りつけてきた。…ここだけの話、今の待ち受けはその写真だ。

「はぅ…んー♪」そしてさっきから僕の右腕に抱きついている。歩きにくいが、良い匂いがするし気持ちいいのでそのままにしておく。

ずっとイチャイチャして、プールサイドに誰も居なかったためそこで休憩することにした。
「今日はありがとうね。楽しかったよ」と頭をくしゃくしゃしながら撫でる。「きゃー」と嬉しそうにしていたので思わず
「愛してるよ、真琴」と言ってしまった。もちろん真っ赤になっている。

「ふぇっっ！どうしたの？いきなり！」
「真琴が大好き仕方がないんだ、言葉じゃ言い表せないくらいに…」
といい、抱きしめた。
ここまでして気づいたがこれじゃ押し倒されるのでは…？と危惧した矢先にー

「ふふっ…遂に私を受け入れてくれるのね…優しくしてね…」
「真琴…」と押し倒し、シャツに手を…

ーにはならなかった。真琴は腕を背中に回して「私も幸平以外愛したくないからね…」と囁いた。そして真琴は顎を上に向け目を瞑った。綺麗だなと思いながら、唇を重ねた。

『文化祭は以上で終了です。後夜祭に参加する生徒は校庭に来て下さい』
…さて、もうすぐで楽しい時間は終わるな…

後夜祭で学生の主張みたいなのがあり、告白したり教師に嫌味を言ったりしてたのだが真琴いきなり前のお立ち台に現れた。

…何時の間にか行ったみたいだ。自分には関係無いだろうなぁ…とぼんやりと眺めていたんだけど現実ってそんなに甘くない。

「私、磯部真琴は南部幸平が大好きです！もう愛して止みません！もう全てを捧げたいです！」

状況に着いていけないので逃げようとしたらクラスメイトに見つかり揉みくちゃにされてお立ち台に立たされた。

未だに現状把握できず、真琴にキスされた。そして真琴の開口1番が…

「今日から子作りだね♪学生結婚しちゃおうか！」

もちろん、マイクで筒抜け。今日は全力で耐えなければ…こら、そこ。根性無しとか言わないで。それとそんなに恨みがましい目で見ないで。お願いだから！

そして名誉なのか不名誉なのかこれによって学校の伝説が1つ刻まれた。

ー子作りをしたカップルが居ると。

いや、僕はまだ何もしてないからね？

お祭り騒ぎ（後書き）

歌音「騒ぎすぎだ！」
幸平「いや、知らないからね？！」

この後、幸平君が泣き出した為ここで切らせてもらいます。

歌音「…少し強くなろうか…？」
幸平「…うん」

自宅訪問！（前書き）

幸平「えと、酷く甘々です」
真琴「当たり前でしょ♪」
幸平「はぁ…まぁいいか」

結局はバカップル

自宅訪問！

文化祭の2週間後。僕と真琴はいつも通りに甘く過ごしていた。
周りからはいつも冷やかされていたけどね…

なかなか文化祭気分が抜けずに気を抜けたような状態になっていると…

「ほら、幸平！元気ないよ？」

と真琴が話しかけて来た。

「うーん…何かね～。イマイチ祭り気分が抜けなくてね…」
「分からなくは無いわね～。私はもう切り替えたけどね」
「いいなぁ…」

正直、羨ましい。僕は余韻を残したいタイプなんだ。

「そうだ！今日、デートしようか？」
「唐突だね」

でも、最近デートしてないしたまには良いかなぁ…

「うん、良いよ。何処にいきたいの？」
「じゃあ、幸平のお家！」
「何でさぁ…」

何やかんやで押し切られた。
ー僕の決定権は無かった。今度芳樹と翔一で男性の決定権確保運動しようかな…無理そうだけど。

実は前にもウチに来ており、お母さんとはとても仲良しだ。

「お義母さま！お久しぶりです！」
「あらあら、真琴ちゃん。また来てくれたのね～…娘ができたみたいで嬉しいわぁ…」
「じゃあ、娘になりましょうか？」
「うふふ。じゃあ、幸平のお嫁…」
「お母さんの言い方が何か違うし僕を置いて将来を確定しないでくれると幸平感激」

この2人を話させると本当大変な事になるのでここでやめさせる。

「あら？幸平が拗ねちゃったわ。真琴ちゃん、幸平と遊んであげて？」
「はーい。幸平、部屋に入らせて？」
「…うん。はぁ…」

もう疲れた…凄い体力使うんだよ、これ。羨ましいとかいうヤツには…やっぱいいや。

部屋に入ると、真琴は僕の唇を奪った。軽いフレンチキスだ。

「んっ…幸平ぇ…」
「真琴…」

甘えた様な声を出されてドキッとしてしまう。相変わらず、真琴のこの表情には弱い。

「ふぅ…いや、なんやかんや言って幸平私を受け入れてくれるわね…」

「僕は単純に人前でスキンシップを取るのが恥ずかしいだけだよ…ちゅっ」

「んふ…大好きだよ、幸平…」

「僕もだよ…」

頭は甘い痺れで麻痺している。でも、この状態は大好きなので思考を放棄する事にする。

今は目の前の恋人に意識を向けようとした。

「あらあら、夕飯だったのに…お互いが夕飯かしら？」

「…っ…！いつから居たの？」

「えとね、『僕は単純に人前でスキンシップを取るのが…』って所かな。」

「やだわぁ、お義母さま。幸平との愛の語らいを邪魔なさるなんて…」

「うふふ、そうね？じゃあ、お母さんは去るから幸平、最後まできっちり責任取るのよ？」

「何が？」

お父さん、最近は分かりません。助けてください。

…別に死んでは居ないけどね。

どうにか抜け出して、夕飯にありつけた。スキンシップをできなか

ったからか、真琴はずっと膨れていた。
なので、夕飯後は僕の部屋で遊ぶ事にした。
遊ぶといっても寄り添って話すかゲームするかで特別な事はしない。

「幸平…ベットの下に何か隠している？」
「ん？い、嫌。別に。」
「どうして、そこで口籠るかな？何か有るよね？」
「はぁ…良いよ、見ても。」

入ってるのは秘密に買っていたファッション雑誌だ。
何か恥ずかしいじゃん。

そして、真琴は落ち込んでしまった。そんなにお約束が良かったのかな…？理解できないよ…

「幸平…たまにはディープもしてみない？」

と上目遣いに誘って来る。キスは僕も好きなので自ら進んでやる。

「はむ…ん…むっ…」

舌がお互いにふれあい、唾液が絡まる。心臓がドキドキしているが心地よいのでそのままにしておく。

「幸平ぇ…もっとしてよ…」

トロンとした目で見られた。

…ヤバイ、これ可愛すぎるよ。

と思い、強く抱きしめてキスの雨を降らせた。

暫く、キスしたりベタベタしていると

「真琴ちゃん、お風呂に入っちゃいなさい～」

「はい、お義母さま。お邪魔します。」

…え？

「何でウチの風呂に入るの？」

「え？言わなかったっけ？今日は幸平君の家に泊まるって？」

「はぁ？何だって？」

いつの間に決まったの？と思った。曰く、今日の目的はこれだそうな。

ー最近、世の中のスピードについていけてません。助けて…

とりあえず、ぼうっとして待っていると真琴が部屋に来た。…バスタオルを巻いて。

「ちょっと！真琴さん！落ち着こうよ？」

「あら、私を見て嬉しいのかしら？」

「…～っ！僕もお風呂に入ってくる！」

と言って逃げた。ドアの隙間から真琴の悲しそうな顔が見えたが…

お風呂にゆっくり浸かって、着替えて部屋に帰ってきた。
真琴は居なかった。少し寂しかったけど、頭を振って我慢した。
せめてお休みを言いたかったけど、時刻は１２時を回っていたので諦めた。
ーあのときの寂しい顔は…
と考え始めたときにドアがキィっと開いた。
真琴だ。
真琴は何も言わずに僕の布団に入ってきて僕の背中にに抱きついた。
抵抗したかったけど、少し泣いていたから何も言わなかった。
「ねぇ、私がこんなに誘っているのに何で何もしてくれないの？」
悲しいよ…と真琴は囁く。
なので僕は僕の考えを伝える事にした。
「真琴を傷つけそうで怖いんだよ」
「別に良いのに・・・」
「でも僕の心の問題なんだ。だから待ってて欲しいんだ」
こくんと真琴がうなずいたから僕は真琴を抱き締める。
「幸平、大好きだよ・・・」返事として真琴に軽めにキスをした。
真琴も腕を背中に回し、幸せ一杯になったときに意識を手放した。
この日で真琴と僕の関係は更に深まった気がする。

ー後日談けども、朝にお母さんに見つかり携帯で写真を取られた。

恥ずかったけど、

僕と真琴の携帯の待ち受け画像はそれにした。

やっぱり嬉しいじゃん！

えと…ごめん。調子に乗りました…

天体観測

今日１０月２０日１７時。
未明から朝方にかけてオリオン座流星群の最大日だ。
僕ー南部幸平は早く夜にならないかなと現実逃避をしていた。何故ならー…

「ねぇ、幸平？今夜は…一緒だね？」
「そのセリフを顔を伏せて赤らめながら言うのはやめて…と言うより、僕の膝の上に座らないで！」
「えぇ～…ケチ」

目の前にーもとい膝の上で迫って来て居るのは恋人の真琴だ。もう半年経った。早いね。

「正直、この状態で囁かれると精神的にキツいと言うか…」
「ぇ…私の事嫌いなの？」

どうしてそうなるの？何か真琴泣きそうだし！

「ごめん！嫌いじゃないからね？」
「嘘よ。幸平は私の事は飽きたのよ。あの夜はあんなに私を求めたのに！」
「お願いだから事実を曲解しないで！」

確かに事実と言えば事実何だが…

抱きしめただけだぞ！

暫く自由行動という事になったので何処かに行った真琴といい観測ポイントを探しに行く事にした。

ーとりあえず、真琴が先かな…

屋上に出てきた。観測ポイントは頭で決めた。

「ー好きです！付き合ってください！」

…おやおや、告白している子が居るよ。青春だねぇ…

折角だから覗いて見る事にした。男の子はウチの天文部の後輩。女の子は…何かよく見ている様な気がする人だけど…

ーって、真琴！？

みなさん、真琴が告白を受けています。真琴の事だから受けはしないだろうけど…

ーやはり彼氏としては心が痛い。嫉妬しているのだろうか？何かみっともないなぁ…

「ーごめんなさい。私もう好きな人が居るの…」

と断った。男の子は僕たちの関係が分かっていたのか、頭を下げて帰って行った。

正直、ホッとした。

１２時１０分前。各々の観測ポイントに行く事にした。僕はプールサイドを陣取ったから真琴を連れて行った。

「真琴、さっき告白受けてたでしょ…？」

真琴を抱きしめて話しかける。正直、不安なのだ。今目の前に居る人が急に消える事が…

「うん…でもね、幸平が一番だよ？」

「ありがとう。でもね？やっぱり不安なんだよ…」

更にぎゅっと。真琴の温もりを感じる様に抱きしめる。

それから僕たちはレジャーシートをひいて座った。真琴は僕の肩に頭を乗せている。

「えへへ…幸平も嫉妬してくれているんだね」

「そりゃ、可愛い彼女が居れば…」

ボン！と真琴は真っ赤になった。

僕が言って置いて、僕も恥ずかしくなった。

「恥ずかしいよ…」

はにかみながら真琴は僕を見上げた。

綺麗だなと思いながら真琴の唇に重ねたー

「…ん…っ…やば…」

眠くなり寝てしまった。

「真琴、起きて…」

「んっ…」

ぺちぺち。柔らかい頬を叩いてみる。

「おはよう、真琴。もう観測時間真っ只中だよ」

只今2時過ぎ。雲が無い為よく見える。校舎の方を見ると観測中の人が居る。

「ご飯は早いよ、あなた…」

「お腹は減ってないしまだ結婚まで2年早いから。ほら、起きる」

「今日は休日だから寝かせて〜」

ぎゅー。柑橘系のいい匂いがする。何でこんなにいい匂いするんだろうね。世の中の不思議な気がする。

「ほら、流れ星見えるから」

「ん、起きたよ」

相変わらず、肩に頭を乗せて居るけど目は完全に開いている。

上を見ると丁度よく流れていった。尾を引いてるからこれだろう。

「綺麗だね…」

「うん…」

流星群といえども、ガンガン流れるわけではない。たまにちょっと見えるだけだ。

「あ…また流れた」

上手い様に流れてくれる。そういや、現実的だけど流れ星って結局はゴミなんだよね。つまり、流れ星に願かけをしてるのはゴミにお願いしてるようなものでー

「来年も一緒、来年も一緒、来年も一緒…」

「……」

流れ星にお願いってロマンチックだよね！誰だよ、ゴミだって言ったのは！

…反省します。

でも、折角だし祈ろうかな…

「ずっと一緒に居られます様に…」

うん、なんか浪漫的だね。

天体観測（後書き）

歌音「1日2話だとペースが早くて楽しいな…」
幸平「てか、編集してだしてるから少しはらくでしょ…」
歌音「それは言わないで！」

クリスマスイブ（前書き）

今日は時間の都合上１話だけです。
Ｓｅａｓｏｎも書き溜めてるので明日から１日置きにでも更新して行きます。

クリスマスイブ

「お邪魔しまーす…」

そういって、私は彼の部屋に音を立てないように入る。勿論、お義母様には許可をもらっている。

現在時刻１２月２４日ＡＭ５時。世の中はクリスマスイブだ。恋人同士が楽しむ日を私達も楽しもうという魂胆だ。

今回のサプライズ訪問は彼は勿論知らない。驚かせるためだ。

…ふふふ、幸平驚いてくれるかな。

因みに計画は私が布団に侵入→暫くして幸平の起床→おはようのキス→きゃ☆

だ。きゃ☆はご想像に任せるわ。

よし、まずは幸平の布団に侵入！お邪魔しまーす。

布団に入ると目の前に幸平の顔があってドキッとしてしまう。

何と言うか平和そうな顔と言うべきか、簡単に誰かを虜にしてしまいそうな表情なのだ。

かくいう上、私も虜になった女の子なんだけどね！

とりあえず、このまま布団にいて幸平が起きるのを待つ。

にやけそうな顔を抑えて幸平に寄り添う。片腕が投げ出されていたので二の腕の辺りに頭を乗せて腕枕の状態を作る。
とても幸せです…

ー背中に迫る1つの物体に気づかないまま…

ーふと、僕は意識を覚醒させる。昨晩はとても早く寝たから気持ちがいい。何だか体の中が暖かいし。そうだ、今日は真琴とデートだし早めに起きるか…
とぼんやり考えて起きようとする。

ーどうにも片腕が重い。何だろう？

と思い、目を開ける。すると目の前に真琴がいた。
ー僕が抱きしめる形で。

真琴は真っ赤になったまま僕の背中に腕を回していた。
どうにも僕はまだ寝ぼけているので状況が把握できずに、真琴の唇に自分の唇を重ねてしまった。それも一回では無くて何回も。正直、ふやけるのでは無いのかというレベルまで。

「んっ…はむ…幸平…」
「…！」

ようやく現実が追いついた。

「お、おはよう、真琴」
「ふにゅ…おはよぅ…」

トロンとした目で見上げて来る。可愛すぎてこのまま持ち帰りたい。
いや、もう持ち帰ってるのか…？
どうにかなる前に僕は布団から出た。
「あぁ…計画が…幸平狼化計画が…」
聞こえなかったふりをした。

それからは着替えて、朝食を真琴と一緒に取り、デートに行く事にした。

「真琴？どこに行きたい？」
「幸平とならどこでもいいけど…じゃあショッピングモールに行こうよ！」
「そうだね」

と言いながら真琴は僕の腕に抱きついて来る。寒いけど右腕から暖まってくる。
そして、さりげなくポケットに入ったブツの確認。よし、問題無し。

「ねぇ、こんな服はどうかな？」
僕らはブティックに入り、真琴は白いファーの付いたなんともメルヘンな洋服を選んでいた。
「うん、いいんじゃない？でも、ファー邪魔じゃじゃない？」
「大丈夫なんだよ！」

そういってレジに向かって行く。正直、払って男の意地を見せたいけど、真琴に止められているのでやめる。

それから僕たちは隅から隅まで回り、ゲームセンターでプリクラを撮った。所謂、キスプリというのも撮ってみた。クリスマスイブだし、少しくらいは大胆にね…？

ショッピングモールから出るともうすでに夜になっている。

そんな中、僕たちは手を繋ぎながら歩く。

ーこの時がずっと続いたらな…と思ってしまう。

ついに真琴の家についてしまった。もう終わりか…

「真琴…」

と僕は真琴に顔を寄せる。真琴は抵抗しないで受け入れてくれた。

１０秒程して顔を離すと僕はお小遣いを貯めに貯めて買ったネックレスを渡す事にした。

「これ…僕からのプレゼント」

とペアリングの片割れを渡す。

「ありがとね。ふふ…大切にするからね」

ともう一度キスをする。それからお互いを抱きしめ合う。

ーと、途端に真琴の携帯がなり出す。

僕らは慌てて体を離すと真琴は携帯を確認しだした。
携帯を見ると喜びに満ち溢れ始めた。
「幸平！私の両親が帰ってこないんだって！だから幸平の家に泊まりなさいだって！」
曰く、もうすでにウチの家族にはお願いしたようだ。
僕は嬉しくて抱きしめる。
問題はうちの親も帰ってこない事だが…まぁいいか。
ー今夜は眠れなさそうだね。と僕は思った。
というか、眠れるだろうか…？
凄く心配。

クリスマスイブ（後書き）

歌音「幸平男化…」
幸平「いや、してないからね？！」
真琴「幸平にあんな事されるなんて…私恥ずかしいけど受け入れるわ！」
幸平「だから事実を曲解しないで！」

バレンタインデー

２月１４日。バレンタインデーだ。
恋人が居ない人には苦痛な一日にしかならない。
だが今年の僕は真琴と言う可愛い恋人がいるから楽しむ側だ。
ーそこ、わら人形と五寸釘を持ってこないで。
呪い殺さないで…

朝、真琴は僕の家にやってきた。チョコは帰るまでお預けの様だ。
学校に着くと色々な人がいた。いつも通りに過ごす人、浮かれている人、覚悟を決めた人、いつも以上にソワソワしている人。
流石バレンタインデー。学校の空気を一変させてます。

僕達は下駄箱に入ると僕の下駄箱に小包が入ってるのを見た。
手に取ると可愛いリボンの付いたヤツだ。
誰だか分からないけど、せっせと作ってる所を想像すると微笑んでしまう。
「ー何かな、それは？」
「うぇ！？」
ニコニコ。でも、目が笑ってません。真琴さん、怖いよ…

それから教室に行って机を整理してるとまた小包が出てきた。
ー因みにこれで４個めだ、全部先輩からの。
そして、真琴はさっきからブータれている。嫉妬しているみたいで、こっちからしては可愛い。
「幸平、モテるんだね～。私、全く知らなかったよ～」
「いや、でも本気で受け取る気は無いからさ…」
「…さっき、すごい美人の先輩からもらってた時デレデレしてた…」
痛い所をついてくる。確かに美人さんだったのだ。
「でも、やっぱり真琴が一番だよ」
「言葉だけじゃ嫌だからね！態度で示してくれなきゃ！」
と言われる。真琴はキスを求めているのか…？
流石に恥ずかしいけど、今日は良いかな…と思った。
「真琴…ちゅ…」
「あっ…」
唇を少しだけ避けて口付けた。周りからはフレンチキスにしか見えないだろうね…
「…ほ、本当にしてくれるとは思わなかった…」
「これでいい？」
「もっと…」
流石に勘弁して。ほら、周りから凄い形相で睨んできてる男の子達

がいるから。
芳樹は苦笑いしてるけどさぁ…

帰り。真琴は僕の家に来た。さっきよりはブーたれが治った様だ。
誰も居ないみたいだから何となくぷにぷにと頬をつついてみる。
そうしたら、満更でもない笑みをしたのでやめてみた。そうすると…

「何よ、もっとしてよ…」
「んー…じゃあこれで」

後ろから抱きしめた。髪の毛がくすぐったい。

一旦離れてリビングのソファに座る。そうすると、真琴は僕の上に座った。

「真琴?!」
「まだ、足りないよぅ…」

と言って甘えて来た。

「幸平、モテるから私が目を離した隙に誰かに取られそうで怖いんだよ…」
「…僕は真琴のだから」

何か引っかかるけど気にしない。

暫くすると真琴はチョコをくれた。

「ありがとうね」
「ほら、食べてみて」
「うん」

包みを剥がして1つだけパクリ。甘くてちょっぴり苦い。

「うん、美味しいよ」
「やったぁ…手作りだからどうなるかなって思ったんだけどね」
「そうなの？ほら、食べてみなよ。美味しいよ」
「いや、私が幸平にあげたものだから…」
「じゃあ、僕が真琴にあげればいいんだね」
「え…むっ…」

僕はチョコを口に含んで真琴の口内に入れた。恥ずかしいけど、どうせなら大胆にさ…あれ、この言葉は二回目だよね？

「もう…誰のものにもなっちゃだめだよ？」
「うん…ずっと僕は真琴のモノだからね…」

温め合う様にお互い抱きしめあった。

ーそして、次の日から真琴は僕の前に姿を現さなくなったー

バレンタインデー（後書き）

歌音「次回最終回！」
幸平「って！一話だけ？！」
歌音「Ｓｅａｓｏｎも更新するから！勘弁して！時間がなさするの！」

さようなら。そして…

もう、真琴が居なくなって一ヶ月は経った。毎日、真琴の家に行くんだけれども、誰も居ないのか或いは出る気が無いのか…

「最近、南部君元気ないよね…」

「うん、磯部さんが居なくなったからかなぁ…もう、完全に体の一部みたいな関係だったからねぇ…」

クラスメイトの声が聞こえた気がするが、シャットアウトする。でも、本当に抜け殻の様な毎日を過ごしているのだ。

そして、今日も真琴の家に行く。暫く待ってみるが何も反応がないから帰ろうとした。

「あら…幸平君」

後ろから女性に話しかけられた。見ると真琴のお母さんの様だ。何度もお世話になった。

「お久しぶりです…あの真琴は？」

「今、部屋に居るけど…多分会いたくないだろうし…」

「どうして会いたくないんですか？！」

「説明するわ。近くの公園にいらっしゃい」

「ーえ、引越し？！」
「えぇ、そうよ」
ベンチに座らされ、事の顛末を聞かされた。つまりは転勤で最低でも向こうから5年は帰ってこれないらしい。
「じゃあ、真琴はどうなるんですか？」
「まだ迷ってるんだけどね…私達と一緒に行く事にして欲しいわね。親としてこっちに残して行くのは不安だもの…」
「……」
どうせなら一緒に居たい。でも真琴は…？
「とりあえず…ウチにいらっしゃい。そして真琴と話してね」
連れられて僕は真琴の部屋の前に来た。
「真琴…入ってもいい？」
「……」
カチャとドアが開いた為、入る。真琴はパジャマの様だ。そして、抱きついてきた。震えている。
「やだよぅ…離れたくないよぅ…」
涙声で言ってきた。しかし、この状況は子供の僕にはどうする事もできない。せめて何か繋がりがあれば…
「…繋がり…？そうか！」

「え？何？」
「僕らが婚約すれば良いんだ！」

「ーダメよ」

無情にも真琴のお母さんに告げられる。

「大体、あなた達は学生。幸平君は真琴を養えるの？」
「それは…」
「ね？無理でしょう？私としては真琴を貰って欲しいんだけど、今はダメ」
「じゃあ、お母さん！私ー」
「勘当させてもダメよ。因みに一緒に幸平君の家に住むもダメ。向こうの家は良いと言っても、学校にはどうするの？」

…どうやら手詰まりの様だ。どうしたら……

「但しね、都合が良いけど1つだけ真琴と一緒にこっちに居ても許す条件が有るわ」
「…え？それ何ですか？」
「それは…」

二年後、僕は大学生になった。家から通うのは少しキツイから今日からアパートに住む事になった。

僕は二年間で真琴のお母さんに課せられた条件を貸す為に頑張った。

内容は婚約指輪の購入。何とも現実離れした様な話だが、事実だ。二年間、バイトを頑張りどうにかお金を貯めた。勿論、真琴の所には長期休暇を使って遊びに行った。

そしてー…

「おかえり幸平」

笑顔で真琴は僕を迎え入れてくれた。彼女の左手の薬指には僕の上げた指輪。

「ただいま」

僕達は結婚したー

さようなら。そして…（後書き）

はい！一応これで本編は終了となります！
この後の話は一応あるのですが、Ｓｅａｓｏｎが終わり次第になります。

駄文でしたがお付き合いしていただいた方ありがとうございますｍ（＿＿）ｍ
この場でお礼をさせていただきます。

今後も見かけたら読んでくださると嬉しいです。

では、次は番外編で…

そして、それから…（前書き）

アフターストーリーです。

そして、それから…

僕達が高校を卒業して大学に進学して…真琴と暮らし始めてもう４ヶ月。

もうずっと一緒なんだし、色々してしまったわけで…まぁ、それはいいよね。
まだ完全に既成事実は作られてないし、作らない様に努力…うん。

僕と真琴は同じ学部に入った。友達も増えたし、芳樹と翔一達のライブにも行かせてもらっている。
ただ、最近は人気が出てきた為入れなくなりそうだけど…それは別の話かな。

「幸平、朝ご飯だよ？」
「分かった、今行くねー」

自室というよりも共同寝室を出てリビングへ。
僕の大好きなお嫁さんが料理を並べていた。旧姓磯辺、現南部真琴だ。
苗字が同じだったから入学当初色々混乱が起きたのはここだけの話。

「ねぇ、今日の講習終わったら何処かに行かない？」
「ん、良いね。どこ行こっか？」
「午前だけだし…海でもさ」
「オッケー」

そう言って僕は真琴が作ってくれた朝ご飯を食べる。ん、美味い。
「…どう？美味しいかな？」
「今まで洋食だったのにいきなり和食になったからビックリしたけど、美味いよ」
「良かった～」
そう言ってニコニコしながら食べ始める。
何かもう完全に夫婦…いや、結婚してるんだけどさ。

大学に着き、講習を受けに行く。
「よう、南部夫妻。後で暇なら飲みに行かないか？」
「あー…ごめん、この後出かけるんだ」
「ごめんね…」
「まぁ良いけどさ…お前らデートか？」
「うん」
「独り身に栄光を！つか、リア充死ねぇ！妻帯者滅びろぉ！」
訳の分からない言葉を発して消えて行く。
入学してからはこんな感じが続いているのだ。

講習を受け、海を目指す。
「ねぇ、水着持ってこなくて良かったの？」
「それは今度一日中遊ぶ時にしましょうよ。日焼けしたくないし…」
「あぁ…了解」

手を繋ぎぱなしで電車に乗る。特に会話は無いがそれでも心地よい。
二人暮らしを始めてからの独特の雰囲気になりつつある。

「わぁ…やっぱりすいてる…」
「そりゃそうよ、平日だもん」

見るといつもは混んでいるとテレビ放送されている海岸もガラガラだ。

真琴はスカートにしてきたから濡れないだろうけど僕はズボンだから捲る。
…うん、冷たいね。

「冷たいのは幸平の心だよ、バーカ」
「え、何でさ?!」

しかも何回目の心理読み?

「だってウチのお母さんといい、お義母様だって初孫の顔を早く見てみたいって言うのになかなか作らせてくれないしさぁ…」
「…その話初めて聞いたんだけど…」
「この間、幸平が友達と遊びに行った時に私がお義母様達に電話で交渉を…」
「あの時か…!だからあんなに誘って…」
「何か、お義母様達子供を作りたいですとか言ったら即答されたわ。『今更何を言ってるの?もう仕込みは終わってるんじゃ無いの?』だそうよ」
「……」

二の句が告げられなかった…僕の周りは敵だらけ。芳樹も翔一も同

じ事を言ってた気がするけどさ…

「だからさ」

そう言って真琴は体を僕に押し付けてくる。色々くっついてくるわけでほら…あれとか。

「帰ったら…ね？」

「…の部分を大声で言ったら良いよ」

「ーーーー！（自主規制）」

…ごめん、本当に言われた。

さて、どうやってはぐらかそう…

「まぁ、それは置いといて…」

次は体を押し付けるのではなく、抱きしめて上目遣いで僕を見上げる。

「将来どうなるか分からないけど…宜しくね？」

「うん…僕からもお願いするよ」

「…私のお腹の中に…」

「…えっ」

「入る予定の子供も愛してね？」

「そっちね…何か手違いで孕ませたかと…」

「ガッカリした？」

「安心した！」

真琴はションボリして見上げてニコッと笑ってくれた。

「…さ、帰ろう？」
「そうだね。あ…夕飯買って行かないと」
「…じゃあ今日は刺身オンリーで」
「僕は何もツッコまないよ…」
「突っ込む？！」
「黙らっしゃい！」

けらけらと笑う真琴。こんな風に冗談を言い合い、喧嘩したりして…最終的にもう1人か2人増えて、賑やかになるんだろうね。

でも、今はこの2人だけの時間を大切にしたいから…子供は暫く…ね？

「…あ、肉ドレスにして食べてもらうとか…」
「そういう問題じゃない…！」

訂正。何が起きようと笑い飛ばせそうな未来が待ってそうです。

そして、それから…（後書き）

歌音「ようやく終わったよ！」
幸平＆真琴「お疲れ！」
歌音「いや～…一先ず安心かな…」
幸平「この後も芳樹達の話が有るし…頑張って」
真琴「まだ私達も出るからね」

歌音「最後となりましたが、見てくださった方、本当にありがとうございます！
駄文になりかけ（なった時もしばしば）見苦しい場面もあったでしょうが…本当にありがとうございます！」
幸平「では、Ｓｅａｓｏｎの方でまた会いましょう！」
歌音＆幸平＆真琴「ありがとうございました！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9907w/

幸平と真琴の日常

2011年10月9日22時22分発行